

って風速の傾度の無い所では、ジェット軸は、寒帯前線の雲バンドの北辺にあり、ジェット軸も雲バンドも直線のである。

ii) 軸に沿って加速する所では、北に向かい、減速する所では南に向かい中間の所で閉そく前線の雲バンドを横切るのが普通である。

写真の東の方は、高層観測資料が無くて分からないが、150°W以西では、赤道ですぐ北側の雲バンド(N-ITCに伴う)の北端は、200mb面の偏西風と偏東風の境界とよく一致している。第8図の点線が偏西風と偏東風の境界である。

#### 10. 南半球の166°W以東の東西方向の雲バンド

第1図と3図からも分かるように、南半球の160°W以東では、雲が東西方向にかなり組織的に分布している。これらの雲は赤道に近い所ではセル状であり、極に近い所ほどバンド状になる。雲バンド軸の間隔は極に近い所ほど狭く、30°S以南では平均300~400km、以北では、800~900kmぐらになっている。

結語と謝辞……以上のことは、12~1月のATS写真の雲分布の要約で、じょう乱の移動、強さなどによって、日々の状況の変動はあるが、大まかには、ここに示した3枚の写真のどれかに類似している。

ここではおもに北半球のことばかり述べたが、南半球の資料が入手できなかったのでやむを得なかった。

最後に貴重な写真を提供して頂いたシカゴ大学の藤田

哲也教授、電波研究所の平井正一氏、討論に参加して頂いた加藤茂数、根本順吉の両技官、太平洋上の資料収集に協力して頂いた向山末一、杉本豊技官らに厚く感謝する。

#### 参 考 文 献

- 1) Anderson R.K., Ferguson E.W., Oliver V.J., 1966: The use of satellite pictures in weather analysis and forecasting. WMO Tech. Note, 75, 186pp.
- 2) Oliver, V.J., 1965: Fronts. Proceedings of the international seminar on the interpretation and use of meteorological Satellite data, Tokyo, Dec. 1964, JMA 314pp.
- 3) Oliver, V.J., Anderson, R.K. and Ferguson, E.W., 1964: Some examples of the detection of Jet Streams from TIROS photographs. Monthly Weather Rev., 92, 441~445.
- 4) Svedrup H.U., 1943: Oceanography for Meteorologists. 246pp, Prentice-Hall, Inc. N.Y.
- 5) 土屋 清, 1967: 気象衛星資料の利用について, 気象研究ノート, 92, 95~108.
- 6) 土屋 清・保科正男, 1967: 気象衛星APT写真に現われた西太平洋の寒帯前線, ジェット流および低気圧に伴う雲分布, 研究時報, 19巻, 61~73.
- 8) Whitney, L.F. and Gray, T.I.Jr., 1966: On locating jet streams from TIROS photographs, Monthly Weather Rev., 94, 188~194.

#### 〔書 評〕

### 1968年版 気象年鑑 (日本気象協会編)

ここ数年来新聞の社会面やテレビのニュース等で“気象”を扱うことが増えているのに気付かれる方も多いと思う。しかもその内容は、台風や豪雪などに代表されるいわゆる自然災害の問題のみならず、季節の移り変わり、風物詩、行楽といった面もかなり見うけられる。まことに日本人は英国人とならんで、お天気好きな国民のようである。

さて今回出版された68年の気象年鑑を手にとってみると、上に述べたような要求にふさわしい配慮があちこちに見られ、気象に関連した文章を書く人とか、旅行や行事の予定をたてようとする人々には好都合に出来ている。或いはまた1967年365日の天気図や、同年の寒波・梅雨・台風といった項目別の記事をながめながら、個人

的な想い出を楽しむ向きもあるかも知れない。気象の記録という点では、仲々良く整理されていると言えよう。

しかし本書の宣伝文句にある“教育・研究に”というのはいささかいただけない。“台風が前線を刺激”したり“高気圧が低気圧を押し戻し”たりする式の解説におけるマスコミ用のお天気用語と、気象学としての専門語とは一応区別してほしいものである。お天気↔天気予報↔気象学、という安直な結びつけは、それを書く側の反省が特に必要であろう。その欠点は、たとえば巻末の索引の粗末さに如実にあらわれている。次版にはこのへんを意識的にしっかり書き直すことを期待したい。そうすれば本書の気象記録としての特色がより生かされて結構重宝な本になるであろう。(広田 勇)